

1946年平壤・普通江改修工事の再検討

—「突撃」という脱植民地化の技法—

谷川竜一

本稿は、1946年5月21日から55日間にわたって平壤で行われた普通江改修工事を、日本植民地期から連続する工事として読み解くとともに、筆者が手に入れた普通江改修工事に関する新資料を用いて、その実相を解明することを目的としている。分析を通じて主に次の7点——すなわち、1) 普通江改修工事は実は日本植民地期にその7割を終えていたこと、2) 解放後3ヶ月ほどで工事が再開されていたこと、3) 1946年5月初旬に金日成らによってその工事は再計画され、平壤市民を動員した今日よく知られている形になったこと、4) その際の主な工事の内容は、普通江上流の新水路建設と普通江の流れを大きく切り替える南橋堤防であったこと、5) 工事を通じて動員のための労働管理プラットフォームが構築されたこと、6) しかし初期には都市民たちを思うように動かさず、共産党が急遽介入して強く工事を指導し始めることでその課題を解消したこと、7) そして最後に、工事を前進させる上で最も大きな役割を果たしたのが、「突撃隊」による「突撃運動」であり、それによって北朝鮮共産党の存在感が大きく高まったこと、を明らかにした。

1 はじめに

1.1 なぜ1946年の普通江改修工事を取り上げるのか

本稿が対象とする普通江改修工事とは、のちに朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）を建国することとなる金日成らの主導により、1946年5月21日から55日間かけて進められた解放後最初の大規模な河川改修工事である。その内容は、平壤の西郊外を蛇行して流れていた普通江を、新水路によってショートカットさせるいわゆる河川の付け替え工事であり、これによって都市・平壤は普通江の洪水リスクを減らすことに成功するとともに、安全になった旧水路沿岸に工業用地や市街地を拡大させていった。

こうした大きな土木工事を、ときの為政者が国づくりや権力確立のための具体的手段ととらえて利用することは、太古の昔より変わらない。普通江改修工事も、解放の喜びと建国の熱気のなかで、朝鮮人たちにとって最初の「私たちの」建国作業として始まった。起工式には若々しい金日成が現れ、堤防の建設には平壤の都市民たちを中心にのべ

約58万人の朝鮮人たちが動員された。もちろんそこから様々な記念すべきエピソードや「英雄」が生まれている。また、起工日の5月21日は「建設者節」として記念日となった。そうした点で、この普通江改修工事が生み出したのは、平壤西部の洪水防御という実利とともに、建設動員システムの整備、新しい為政者たちのイメージや意図の拡散、そして建国初期の神話とも言えるようなものだった。例えば韓国の北朝鮮研究者・金聖甫らは、「(谷川注：普通江改修工事は)単なる洪水防止工事ではなく、それ以上の意味をもった。普通江の街は「楽園通り」と名付けられ、(…)工事は人民に建国の自信をもたせるきっかけとなり、大衆動員の重要な前例」となったと評価している¹⁾。この意味で普通江改修工事は、国家としての北朝鮮の成立前とはいえ、その歴史のなかでも極めて重要な土木工事と言ってよいだろう。

1.2 これまでの歴史的評価

ただし、この工事を歴史的に考察しようにも、基本的な土木工事の概要すら把握するのが難しいのが実情だ。最大の原因は工事に関する一次資料の欠如であり、特に信頼できる地理空間情報が極めて少ないからだ。その結果、北朝鮮政府ほかの後年の「公式」見解に依拠せざるを得ず、最も必要な土木史的観点からの分析——特に空間的な視点を重視した考察が難しいという状況が続いている。もちろん北朝鮮国内には、一定の土木工学的な資料が残されているはずだ。しかしそんな同国内の多くの研究や歴史書、辞典でさえ、付け替え前後の普通江の新旧水路の関係や、具体的に建設しなければならなかった堤防の建設位置などははっきり示しておらず、細かな地名が省略された説明や簡単な図解にとどまっている²⁾。

もちろん、それでもなかには重要な研究もある。例えば約40年前に出た北朝鮮のキム・ギョンスによる2本の論文は出色のもので、本稿でも取り上げる工事途中での建設体制・計画の修正などにも言及している(詳しくは後述)。彼の普通江改修工事に対する評価は主に三つだ。一つ目は、工事を通じて人々が自分たちで国家を建設できるという確信と経験を得たこと、二つ目は北朝鮮における「大自然改造」のための最初の烽火となったこと、三つ目は「革命の首都」における輝く最初の成果となり、平壤市民の安全な生活と発展を支える都市基盤を確立した、というものだ³⁾。この評価は十分な説得力を持つが、空間的な分析はそれほどなされていない。

他方で、ごく最近、平壤の都市史という側面から大韓民国のキム・テユンが普通江改修工事を新しい視点でとりあげている⁴⁾。キムの関心は平壤の都市空間自体にあり、平

壤の外郭を流れていた普通江の改修工事に対する考察はどちらかと言えば付随的だ。しかしそれでも重要な点は、日本植民地期からの工事の連続性という観点から普通江を論じている点である。そしてその上で、改修工事にもなって普通江周辺の土地の権利関係が日本植民地政府によって整理されていたことが解放後に有効に作用し、しかも動員の方法なども戦時期のやり方がそのままに活用されたとしている。つまりキムの論にしたがえば、解放直後の普通江改修工事は、実質的には日本植民地期の改修工事を連続・継承したものだと言えよう。金日成をはじめとする指導者たちは、日本の「遺産」を「利用」したというわけだ⁵⁾。

1.3 研究の目的と新資料

ただし、キム・テユン論文は、『正路』や『平壤日報』などの断片的な公式報道をもとに組み立てられており、この点で工事全体をどの程度捉えられているのかはわからない。また、土木工事の空間的な部分についても、植民地期の住宅地開発と関連する部分に触れるにとどまっており、植民地期と解放後の工事の空間的連続性に関する分析も十分ではない。特に、日本植民地期の「遺産」を「利用」したといっても、実際に解放の時点でどの程度普通江改修工事が出来上がっていたのかは検討する必要があるだろう。それによって「利用」の意味合いも当然異なってくるはずだ。

加えて、そもそも建築や土木構造物、あるいはその生産システムはそう易々と代えられないという事情を念頭に置けば、その「利用」というキーワードはもう少し慎重に扱うべきかもしれない。というのも、例えば第二次大戦後、東アジアや東南アジアにおいては多くの植民地が独立して新興国家が誕生したが、そうした地域のいたる所で植民地期からのインフラ・ストックの継続使用、プロジェクトの継承は見られた⁶⁾。この理由には、建築や土木構造物はひとつひとつの規模が大きく、またその土地と物理的に強く結び付くため、家財道具を入れ替えるような気軽さでは取り換えられないという事情がある。また、大規模な土木工事などは同時代の支配的な科学的思考の下で合理的に考えられており、統治機構が変化しても計画を変える必要はなかったということもある。こうした点を考慮せず、金日成をはじめとする指導者たちが日本植民地期の「遺産」を「利用」したというのは、彼らが様々な選択肢を自由に取捨選択できたかのような印象に繋がりがねず、注意が必要だ。

本稿ではこうした問題意識を背景として、普通江改修工事を日本植民地期にまで遡って、可能な限り空間的かつ系譜的に再検討することから考察を始める。キム・テユンの

指摘を、より具体的に、そして別の方法で分析するということになるだろう。その上で、まだほとんど明らかになっていない解放後の普通江改修工事の実態の解明に挑戦したい。筆者は先に、同工事の土木史的な考察には一次資料が欠如していると述べたが、本稿では新資料を用いる。それは1946年7月の普通江改修工事の竣工を記念して出版された『普通江改修工事特輯』という冊子であり⁷⁾、公式の報告書とも言えるものだ。こうした資料のほかにも、今まであまり活用されてこなかった航空写真などの視覚資料を活かせば、植民地期から解放後にわたって進められた普通江改修工事の実態に一步近づくことができるかもしれない。そしてその作業を通じて、植民地支配からの解放のなかで働いた日本と北朝鮮をめぐるポストコロニアルな力学の解明に、建築・都市・土木の分野から貢献したい——それが本稿の目的である。

2 日本植民地期の普通江改修工事

2.1 1934年の「大同江普通江合流点附近改修工事」

植民地期の朝鮮の土木史を長く研究して来た広瀬貞三によれば、朝鮮の河川事業はおおまかに三期にわけて理解できるという⁸⁾。第一期は「準備期」(1910~1925年)で、朝鮮総督府はこの期間において朝鮮全体の主要な河川を踏査するとともに、各河川改修計画を立案した。あくまで準備期間であり、ほとんどの河川でまだ手が付けられていない。第二期は「直轄河川の改修期」(1926~1935年)である。この期間に朝鮮内の直轄河川を中心とした主要河川の改修工事が行われた。そして最後の第三期は「中小河川の改修期」(1936~1945年)で、朝鮮内の主要な河川の工事が落ち着き、中小河川の改修工事が本格化する時期である。正確な数は不明だが、1945年までに少なくとも221の中小河川の工事が進んだ⁹⁾。

普通江は、日本の京都を流れる鴨川の3倍程度の中小河川の一つである¹⁰⁾。しかし直轄河川である大同江の整備との関係で、普通江に手がつけられたのは中小河川としては1934年と若干早く、上記の第二期の終わりであった。総督府は1934年にその目的を次のように述べている。

(谷川注：普通江の下流部は)平壤府ノ發展ニ從ヒ将来市街地タル素地ヲ有ス。然ルニ該部ハ流路屈曲シ河流ノ疎通悪シク年々洪水時ニ於ケル被害甚大ナルモノアリ。仍テ最モ急ヲ要スル下流部区間ヲ選ビ(・・・),平壤府外ニ當ル六方軒ヲ水

害ヲ防護セントス¹¹⁾。

新しく安全な市街地を都市郊外に追加していくための基礎工事だったことがわかる。具体的には、総工費70万円をかけて大同江との合流点に至る普通江左岸に長さ1.6km、堤防上部の幅6mの防水堤を築造し、それに沿って幅員80mの水路（放水路）の建設を計画していた。また、その防水堤の背後は40万m²の遊水池にすることとし、将来的に必要なが生じれば経済活動を後押しするためにも船溜の機能も持たせる予定だったようだ（図

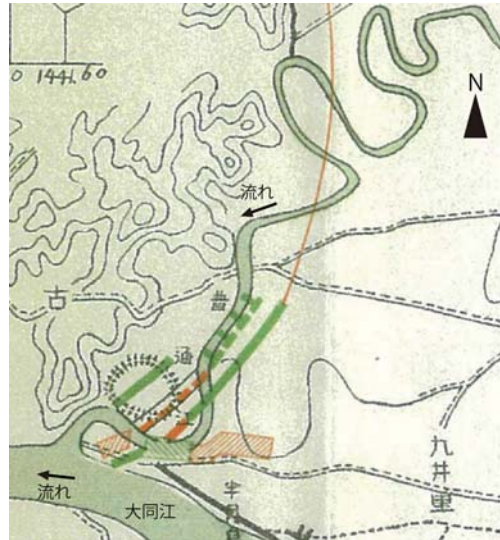
1）。しかし平壤の経済成長は顕著であり、早くも翌年には遊水池兼船溜にすることとなった¹²⁾。

この工事は、植民地期になされた普通江に関する改修工事の嚆矢とすることができるが、その工事空間は文字どおり大同江と普通江の「合流点」に限定されており、普通江の包括的な改修とは言いがたい。また、関係資料のなかにもより大きな計画を匂わせる文言は見あたらないし、始まった工事自体も中断したり¹³⁾、あるいは数度の修正を迫られたりして、最終的に規模もかなり縮小されていた¹⁴⁾。そのためこの資料だけ見れば、場当たり的な工事だったように見える。

だが、実は工事の背景にはより大きな都市計画があった。これまでほとんど論じられてこなかったが、1928年末に作成された『平壤都市計画書』内の計画案のなかに、最初の普通江全体の改修計画が示されており（図2）¹⁵⁾、先述の大同江と普通江の合流点の工事はその一部をなすものとして描かれているのだ。以下、詳しく見てみよう。

同書によると、まず平壤西部の普通江の蛇行部は、「将来市街地たるべき主要部分」であるため、「到底此の儘に放置し難き」ものがあつた¹⁶⁾。そのため、大馳嶺里「ヨツクルマルク」の鞍部を開鑿して、普通江を新たに付け替えるという。その主な具体的特徴を整理すると、総幅員200m、中央に幅員70mの低水路を大馳嶺里の丘に開鑿して普通江をそちらに切り替え（①）、旧水路は幅員50mから100mほどの運河にして周

図1 大同江普通江合流点附近改修工事平面図（拡大）



（朝鮮総督府（1940）『第二次・第三次朝鮮窮民救済治水水工事年報』昭和九・十・十一年度、朝鮮総督府内務局）

図2 1928年末作成「附図第二号 平壤都市計画街路網運河及公園配置図」(拡大)



(地名等、谷川が付記した(朝鮮総督府(1930)『平壤都市計画書』朝鮮総督府内務局土木課。))

辺地域の工業地としての価値を高めることを目的としていた(②)¹⁷⁾。また、普通江と大同江の合流点付近には、その運河(旧水路)と接続するように45万 m^2 の船溜を設けることを示唆している(③)。この船溜は、平壤市内の内水の氾濫が見込まれる際の遊水池としての利用も見込まれていた¹⁸⁾。

そもそも『平壤都市計画書』が、どの程度現実性をもつものだったのかはよくわかっていない。しかし、1928年末の時点で、すでに普通江改修の包括的な計画は描かれており、その具体的構成が①～③の工事であった。そしてその③の普通江と大同江の合流点の工事が、1934年以降に「大同江普通江合流点附近改修工事」として進められたと考えざるを得ない。それは縮小されたものの1937年に一応の完成を見ている。

だが注意しておきたいことは、それで水害が減ったかと言えば、そうではなかった点だ。例えば1938年7月¹⁹⁾、1939年9月²⁰⁾、1940年8月と²¹⁾、普通江はほぼ毎増水して沿岸の住宅に浸水被害を及ぼしており、そのたびに周辺に住む貧民たちの家が流された。なかでも1942年8月の水害は深刻で、西平壤一帯を中心に7500戸が浸水するという大氾濫を起こしている²²⁾。結局のところ、普通江は大同江との合流点以外(つまり①、②の工事)は手つかずのままであり、③「大同江普通江合流点附近改修工事」だけでは、西平壤一帯の普通江沿岸を洪水から守る効果はほとんどなかったと言えるだろう。

う。

2.2 中小河川改修工事における普通江改修工事

それでは、1928年の『平壤都市計画書』に掲載された①～③で構成される普通江の包括的な改修計画のうち、残る①普通江自体の付け替え、②旧水路の運河化はどうなったのだろうか。それぞれ見ていこう。

1928年の『平壤都市計画書』の次に、普通江の改修工事が包括性をもって描かれるのは、管見の限り1938年の「平壤市街地計画平面図」においてである(図3)²³⁾。この計画は平壤に実際に適応された計画であり、その後大きな変更は認められないので、少なくとも1938年から敗戦まではこの計画が平壤のランドデザインであったと考えられる。その新旧案の普通江改修工事部分を比較すると、1928年計画と1938年の計画で①～③のコンセプトは共通している。しかし、①の新水路の位置は大きく変更されていた。1938年の計画では、①の普通江自体の付け替えのための新水路建設位置が、大馳嶺里(図3内黒破線)から西の鳳岫里(図3内白実線)に5kmほどずれているのだ²⁴⁾。この変更後の計画を①'としておく。移動の理由は、1936年7月18日付けの

図3 1938年平壤市街地計画平面図



(地名や方位, 説明などは谷川が付記した ((1938)「平壤市街地計画平面図」1: 15000)。

『毎日新報』によれば、京義線の路線と普通江の新水路が重複したため、新水路を西に変更したことによる²⁵⁾。鉄道計画を優先したわけだが²⁶⁾、総督府の土木技術者は、さらに西に新水路を移したことで、平壤の西方への発展面積は増えることとなったと肯定的に説明している²⁷⁾。

この変更された1938年の新水路計画(①')を丁寧に見ていくと、そのルートは西川面にある下堂里の南西約1km地点から整備し、鳳岫里附近の丘の最も幅の狭くなっているところを南向きに切り通している。そしてそこから堂上里の丘の麓に沿って南下し、大同江へと合流するというものだった。堂上里附近の堤防は左岸に用意し、右岸は堂上里の斜面自体を利用するつもりだったようだ。堤防建設の労力を最大限減らすために自然地形に沿って流路を決めたのだろう。これ以後、ルートの変更はなかったようで、1941年の公文書記録によると「10 軒大同郡西川面下堂里以下河口ニ至ル」もので、建設する堤防は高さ5m、延長11kmあり、水路の幅は215mとあった²⁸⁾。ルートは1938年の計画と同じと考えられ、これが植民地期における最終計画案であり実施案と思われる。

この工事がいつ始まったのか、そしてそれが1945年8月15日の時点で厳密にどの程度完成したのかを示す信頼できる公的な資料は今のところ見あたらない。しかし本稿後半で1946年の金日成らによる普通江改修工事を検討するにあたり、少なくとも敗戦の段階で工事がどこまで進んでいたのかという点は重要なポイントとなる。というのも、日本植民地政府による普通江改修工事の完成具合によって、解放後に普通江改修工事が連続したこと、ないしそれを継承したことの意味が変わってくるからだ。

結論から先に述べれば、実は工事は少なくとも7割は完成していた。根拠は二つだ。一つは平安南道における「中小河川改修工事」の竣工率が、1943年9月末の段階で69%とされていることである²⁹⁾。これは平安南道の河川工事全体の総括的な数値なので、普通江が何%だったかはわからない。しかしそもそも普通江の付け替え工事(①')は1937年以降、朝鮮全土の中小河川の改修工事の一つとして始まっていた。当初5ヵ年400万円の予算で施工することとなっており³⁰⁾、これは平安南道の中小河川改修工事的なかでも飛び抜けて大きな額であった。その点を踏まえると普通江の工事はこの地方における最も重要な改修工事だったことを示している³¹⁾。つまり、そんな平安南道全体の竣工率が69%だったということは、その数値はそこで最も大きなウエイトを占めた普通江の竣工率と大差ないと考えられる。

もう一つの根拠は、米軍が1944年12月に撮影した航空写真である。それを見ると堂

図4 1944年12月米軍による平壤航空写真



(地名や方位、説明などは谷川が付記した (No.75, Korea (including Tsushima and Quelpert) : Volume 1 (Reports), Chapters VII-XIV, April 1945 THRU Volume 2 (Plans), April 1945, page 128 Roll 3, Joint Army—Navy Intelligence Studies (JANIS), 1944-1945, Record Group 243, National Archives at College Park, MD.)。)

上里の丘の裾野に沿って新水路の堤防が建設されている様子がわかる (図4)³²⁾。少なくとも、大同江の合流地点から鳳岫里附近の丘の南側までは堤防工事が進んでいると見てよいらろう。

こうした資料から判断するに、普通江の新水路への付け替え工事 (①') は、1945年8月の段階で、少なくとも7割方終わっていたと考えるのが妥当だ。残る工事は、この航空写真には写っていない鳳岫里附近の丘の開鑿工事や、それより上流の西川面下堂里附近の堤防工事だったのではないか。

ところで、このように工事が完成できなかったことにはいくつかの理由がある。一点目は、度重なる予算の削減によって、その都度計画が延長されたことがあげられよう³³⁾。そして二点目は、戦争が本格化していくなかで肝心の労働力も十分に確保できなくなったことだ。困った土木課は、農閑期にある愛国班員を動員して、普通江の河川改修工事に勤労作業として参加させるよう平安南道国民総力課に要請している。労賃は出

たとえられるが、現場では作業の前後に「国民儀礼」を実施し、班旗の下で労働を行って班員の訓練を図ることが求められたり、その労賃も一部「国防献金などに寄付」することが指示されたりしていた³⁴⁾。「国民儀礼」とはおそらく宮城遙拝や国歌斉唱のことだろう³⁵⁾。要するにこの工事は、戦争の進展と共に公共事業としての体裁を失っていき、植民地における国家総力戦体制の下での動員と思想統制、そして労働者からの「献金」という経費還元なくしては、もはや前に進まなくなっていたのだ。

最後に、残された旧水路の運河化工事(②)にも触れておく。原理的に考えれば当然ではあるが、この工事を普通江の新水路建設(①')よりも先に始めてしまうと、増水時に運河工事現場で氾濫が起こって工事が台無しになりかねない。したがって、普通江の新水路への付け替え工事完成後に運河化を進める必要があった。にもかかわらず新聞紙面などを追っていくと、新水路建設の話はほとんど出てこない一方で、旧水路の運河化の計画は、旧水路沿いの未利用地を工業用地や住宅地として活用していく話と繋げられて1936年頃から喧伝されていた。むしろ新聞だけ読んでいけば、運河による都市開発の話ばかりが目につき、工事が実態以上に進展していたような印象すら受けてしまう。例えば土地買収に際してはブローカーが暗躍していたし、そんな投機的動きを牽制しようと平壤商工会議所が工場の誘致に関与しようとしていた³⁶⁾。1940年7月には堂上里方面の土地買収にほぼ目処がついたとして、工業地区の分譲希望者を募り始めてさえいた³⁷⁾。新水路の工事報道がほとんどない上、旧水路の運河化工事の具体的な進展すら見えないなかで、このような前のめりの報道がなされていたのだ。つまるところ平壤の都市民にとって、新水路の建設(①')よりも旧水路の運河化(②)の方が、ずっと利益を想像しやすい工事として受け止められていたのだろう。そして運河化工事は最後までほとんど進まなかった。先に掲げた1944年12月の米軍の航空写真を見れば、1938年の計画図にある幾何学的な運河は依然整備されていないことは一目瞭然だ。普通江旧水路の運河化に関してはほとんど手がつけられなかったのである。

3 1946年の普通江改修工事

3.1 資料『普通江改修工事特輯』

ここからは1946年5月から7月まで、金日成らの指導の下で進められた普通江改修工事を扱う。それに先立ち本稿で中心的に用いる『普通江改修工事特輯』の内容を簡単に紹介しておきたい。

普通江改修工事完遂慶祝準備委員会編『普通江改修工事特輯』（以下、『普通江』とする）は、1946年9月に5部構成全133頁で出版された。第1部の主題は「金日成將軍の激励の辞、郷土建設隊員一同が金日成將軍に捧げるメッセージ」というものだ。具体的には1946年5月21日の起工式における金日成の演説の要旨と、建設を担う人びとのそれに対する返答からなっている。

第2部は、「普通江改修工事を計画しながら」という主題で、平安南道人民委員会ほか担当各機関が作成した複数の文書からなっており、概ね工事開始前後までに関係者が考えていた目的やその内容、意義や計画が示されていた。

第3部は「普通江改修工事を完修して」として、工事責任者や共産党の工事報告、それからソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連）に対する感謝の言葉が収められている。いずれも竣工後か、あるいは工事の終わりが見えた段階での工事に対する認識を示す文章と言える。

第4部は「文芸」という主題で、著名な小説家である金史良や詩人・李燦による普通江を題材にした詩や戯曲が並ぶ。これらの作品は存在は知られていたが、内容自体が不明とされてきたものであり、高い文学史的意味を持つもの³⁸⁾。

第5部は、「其他」として、1946年の普通江改修の現場で事故死した任正彬という人物の個人略史³⁹⁾、普通江に関する短い文化史からなっている。

改修工事の実相に迫る上で、第1～3部が最も重要な情報源と思われる。その際、興味深いのは、各文書の作成主体や作成時期が微妙に異なるため、そこに認識の差異や変化が見られることだ。普通江改修工事の説明は北朝鮮の様々な歴史資料に見ることができ、後年の資料になればなるほど、その説明は首尾一貫しており、この『普通江』で見られるような矛盾や揺らぎは見あたらない。したがって、この資料内に見られる一貫性のなさは、逆に当局の事後的な編集が行き届いておらず、むしろ現実をより照らし出していると考えべきだろう。こうした事情に鑑み、本稿では後年の資料は二次的に扱うこととし、『普通江』を中心資料としつつ、解放後の普通江改修工事の進展を時系列で押さえながら考察を進めることとする⁴⁰⁾。

3.2 連続する植民地期の計画・目的・人材

日本植民地期の普通江改修工事が、解放後の1946年5月21日に始まる普通江改修工事に連続するのであれば、その間——つまり1945年8月以降、1946年5月までの具体的経過から検討せねばならない。この点について『普通江』に、平安南道人民委員会の

技術責任者が、「普通江改修の重要性と工事経過報告」という文章を寄せて、工事の理由やその具体的経過および内容を説明している⁴¹⁾。

彼がまず強調するのは、普通江の水害の大きさである。普通江は一旦洪水になると沿岸一帯の被害は少なくなく、特に大同江からの逆流によって浸水は数日間に及び、例えば植民地期の1942年8月の洪水では西平壤一帯が海のようになって被害は巨額に達したという⁴²⁾。それゆえこうした被害を除去できれば、普通江沿岸の耕地改良や生活の安全、交通治安の向上に資するだけでなく、大馳嶺里方面の約130万坪は市街地及び工場用地として発展が期待できると述べている。そしてもちろん、過去において日本植民地政府もそれに気づいており、1937年7月以降莫大な費用をかけて300万人の労力を使役し、戦争末期においては「特別報国隊一日当たり1000名を割り当てて、敗戦当日となる8月15日まで（谷川注：工事を）継続した」。それは未完に終わったが、今回自分たちが、「本工事を国土計画上、大平壤を建設し、北朝鮮の政治、経済、文化の中心地として向上発展」させると述べている。具体的には普通江新水路の左岸の築堤と掘削工事を「第一期工事」として、1945年11月6日に起工し、1946年6月末に竣工を予定しているというのだ。最後に、今後100万人をかけて、延長8kmの堤防建設、土量70万m³を処理すると付け加えている。

この説明から、普通江改修工事が敗戦当日まで続けられていただけでなく、解放後の1945年11月から1946年6月末までを「第一期工事」として、工事が再開されていたことがわかる⁴³⁾。その際の工事の目的は、新水路建設を完成させ、西平壤一帯の防水工事を進めるとともに、旧水路沿岸部の大馳嶺里を中心に、平壤の新しい市街地と工業用地を形成するという、まさしく日本植民地政府の掲げた目的と同じであった。しかも新水路の開鑿ルートも日本植民地期の計画と同じであり（後述する）、これらを踏まえれば解放後の工事は、植民地期に日本が行おうとしていた①'と②の工事と全く同じであった。植民地期の計画や目的はやはり連続していたのである。

ところで、工事の最高責任者と考えられる平安南道人民委員会の技術責任者は、『普通江』の別の箇所でも朴均采という名で紹介されている⁴⁴⁾。日本植民地期の職員録で彼の名を確認したところ、少なくとも1933年から1940年まで、朴均采は断続的に平安南道内務部土木課の土木技手を勤めていた⁴⁵⁾。その後敗戦までの彼の所属はわからない。他方で、植民地期に建設部門を担当していた技術者たちが1945年9月に集められて平壤市施工団が組織され、それが1946年2月に平壤市人民委員会都市経営部土木課となったことはわかっている⁴⁶⁾。しかもこの組織が普通江改修工事の設計を担当していたとい

うから、朴均采もそこにいた可能性が高い。そしてその流れで、工事の技術部門の最高責任者として名を連ねたと考えられる⁴⁷⁾。

以上から、植民地期から解放後に至る流れのなかで、普通江改修工事は目的や計画内容だけでなく、人材までもが切断されずに連続していたと考えてよいだろう。解放以降も、普通江改修工事は植民地期からのいわば「慣性」にしたがって、粛々と続いていたのだ。

3.3 普通江改修工事の実施の背景

それでは、普通江改修工事はいつ、植民地期の慣性から離脱・切断されるのだろうか。

例えば北朝鮮の建築・土木史の基本書である『平壤建設全史』などでは、1945年12月に金日成が普通江を散歩している際に、改修工事の必要性を認識したと説明されている。同書によると、その後彼は翌年4月9日に工事の設計を指導し、5月8日には現地指導を行って関係部門と協議したらしい⁴⁸⁾。以上の記述は5月21日の歴史的な着工式に向けて、段階的に準備が進んだことを示唆しており、金日成が普通江の改修に数ヶ月の間配慮してきたような印象を受ける。

これに対して、工事における総指導本部の責任者で、『普通江』に「普通江改修工事完遂総結報告」を寄せた尹公欽は⁴⁹⁾、次のように工事の経緯を説明している。

農民大衆を封建地主の搾取から解放してくれたわが民族の英明な領導者・金日成將軍が、この土地改革問題と繋がる普通江改修工事に無関心であるはずがない。5月初旬に、金日成將軍はソ連軍のロマネンコ少將とともに、われらが洪箕疇委員長を帯同し、普通江現場を踏査なされた。その結果、その重要性を強調され、即刻われらが道委員長に（谷川注：工事を）指示された⁵⁰⁾。

このなかに1945年12月の金日成の散歩や翌年4月の設計指導云々は一切出てこない。むしろ5月初旬にいきなり工事を指示したような印象を受ける。起工式が5月21日だったことを考えれば、それはあまりに直前だ。しかも、金日成とともに現地に行ったロマネンコは、よく知られているようにソ連軍政下における民政部の長官であった。この文章を書いた尹公欽が、この経緯を土地改革と関係づけている点からも、工事の決定はソ連が行った土地改革事業に関する指導の一つのように思える。しかし、こうした

ことも通説には出てこない。

金日成が、通説通り 1945 年 12 月から半年ほど時間をかけて段階的にソ連抜きで工事計画を進めてきたのか、それともこの『普通江』の尹の記述にあるように、金日成とロマネンコが 1946 年 5 月初旬に唐突に計画を思い立ったのか。二者択一のような話で戸惑うが、この二つの話は両方とも正しく、むしろ両立するものとして読むべきではないだろうか。つまり次のようなストーリーだ。

1945 年 11 月に植民地期のやり方をほぼ踏襲して工事再開していた現場に、金日成が翌月（12 月）訪れた——きっかけは散歩でも何でも良い——。そしてその後の 1946 年 4 月にその流れで設計指導も行った。しかし、続く 5 月初旬に金日成が現地を訪れた際に、この工事の重要性や有用性に突如気づかされて、それまでの方針を変えた。ロマネンコとともにいたことが明示されている以上、それはソ連側の指示や助言が強く反映された可能性が高い。

『普通江』にはソ連の関与がほとんど具体的に語られていないので、以上のストーリーはあくまで想像に過ぎないが、しかしこの急な方針転換は、このような流れでなされたものだったのではないだろうか。そしてだからこそ、次に示すようなこの後の性急な動員計画の立案やその実施とも辻褄が合う。

まず金日成とロマネンコの現地踏査から間もない 1946 年 5 月 14 日に、第一回「政府機関政党社会団体代表者連席会議」が開かれ、ここで普通江改修工事を急速に完遂することが正式に総意として決められた。そして続いて「普通江改修工事建国労力動員」という名の下で、一定期間平壤市民を無報酬で動員し、それによって「第二期工事」を完成させることとなった。先に見たように、解放後の 1945 年 11 月から翌年 6 月末までの工事を、改修工事の技術責任者である朴均采は「第一期工事」と呼んでいた点を踏まえれば、工事はここで「第二期工事」という別のフェーズに移ったと考えられる。この「第二期工事」の具体的な計画も、平安南道人民委員会の工事技術責任者——つまり先の朴均采が立て、動員については平壤市の人民委員会の動員責任者の計画に応じて行うこととしたようだ。

ここで驚くのは、動員期間が 5 月 17 日から 7 月 31 日までの 76 日間とされたことだ（実際は工期は短縮されて 5 月 21 日から 7 月 15 日までとなった。また、後述するように動員対象となっても、全期間労働するわけではない⁵¹⁾）。5 月 14 日の工事の急速完遂に関する決定からわずか 3 日で平壤市民の大がかりな動員を実施するというのである。5 月初旬の金日成の「即刻指示」から考えてみても、急速完遂とそのための動員の決

定、そしてその実施までが半月ほどで進んでおり、かなり慌ただしい展開だ。

以上を短くまとめれば、金日成が当初行っていた視察や指導は植民地期の延長で粛々と進められていた「第一期工事」に対してであったと考えられる。そして1946年5月にロマネンコとともに現場に訪れた際に、「第二期工事」として多くの都市民を動員した大がかりで派手な普通江改修工事を立案したのではないだろうか。朴均采は、植民地期の普通江改修工事では、一日当たり1000名の特別報国隊を工事に割り当てていたと証言していたが、解放後の1946年の普通江改修工事では最終的に55日間でのべ約58万人を動員しており、一日あたり平均1万人が動員されたことになる。植民地期とはまさしく桁違いの動員工事が、都市民全体の力で進められようとしていたのだ。したがって普通江改修工事に歴史的断絶があるとすれば、1945年8月15日にあるのではなく、「第一期工事」と「第二期工事」のあいだ——つまりは動員を決めた1946年の5月初旬、あるいは「第二期工事」が始まった5月21日の起工式にあると言った方がよいだろう。ここに介在したであろうソ連の関与は具体的にはまだわからないが、このような大規模な動員を軸にした大工事が普通江で始まったのである。

3.4 工事空間

次に工事空間を具体的に見ていこう。残念ながら『普通江』に掲載された工事の地理空間情報は、ひどく大ざっぱに見える「普通江改修工事図面」が1枚あるのみである(図5)⁵²)。しかし、場所の前後関係は正確で、先の1938年の「平壤市街地計画平面図」と丁寧と比較すると、その新水路の建設ルートは全く同じであった。ただし、工事自体はその新水路の建設(①')しか図示されておらず、もう一つの目的であった旧水路の運河化工事(②)によってその周りに工業用地を造成する計画図は、ここでは記されていない。よって1946年の普通江改修計画は、新水路開鑿が主目的だったと判断できる。

とはいえ、その水路の大きさや詳細な位置についても『普通江』には記載がなく、丁寧な検討が難しい。後年出された『平壤建設全史』によれば、解放後の改修工事における新水路の幅は50m、堤防は高さ5mであったという⁵³)。これは先にあげた1941年の植民地期の工事における水路幅215m(そのうち低水路部分の幅は70m前後と思われる)、堤防高さ5mと比較しても、よく似た規模の建設だったと思われる。結局具体的な工事空間も、植民地期のものとほとんど同じか、ややダウンサイズしたものだったと考えてよいだろう。

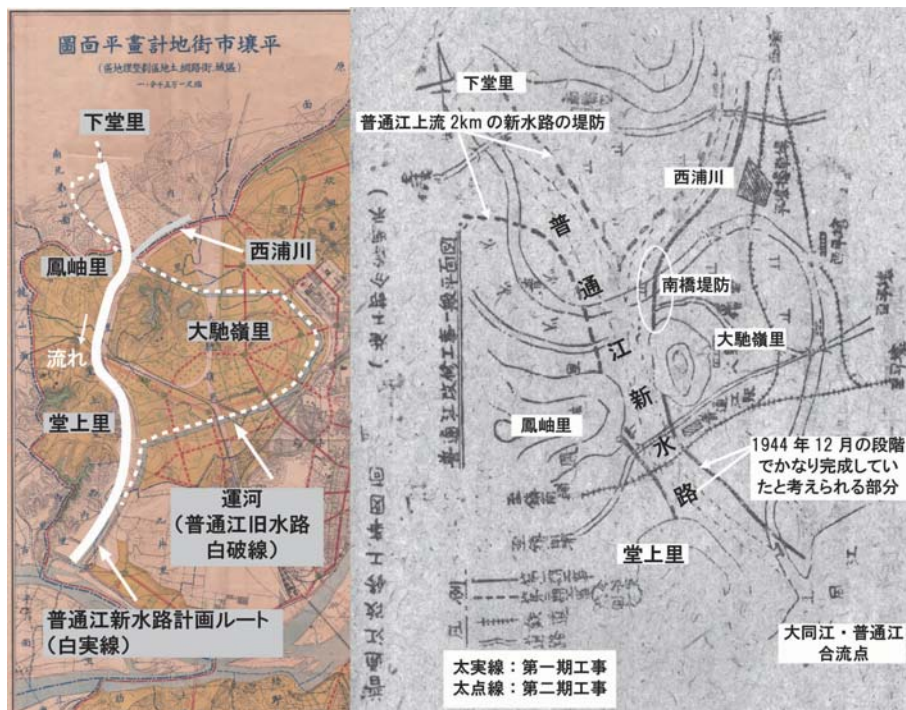
工期については、「普通江改修工事図面」に「第一期工事」が太実線で、「第二期工

事」が太点線で書かれているが、前述の筆者の分析を踏まえれば、「第一期工事」は1945年11月から1946年6月まで、「第二期工事」は1946年5月21日以降の工事と考えられる。『普通江』には第一期、第二期に関する説明はこの他にまったく出てこない。『普通江』には第一期、第二期に関する説明はこの他にまったく出てこない。『普通江』には第一期、第二期に関する説明はこの他にまったく出てこない。『普通江』には第一期、第二期に関する説明はこの他にまったく出てこない。『普通江』には第一期、第二期に関する説明はこの他にまったく出てこない。

しかも、繰り返して述べてきたように、そもそも普通江の新水路建設工事(①)は1945年8月の時点でその7割が完成していた。特に鳳岫里から南の堤防は、すでに植民地期においてかなり出来上がっていたと考えられる。また、図版に見える西浦川は河川としては小さいので、堤防や水路整備はそこまで大きな工事ではなかったはずだ。こうした情報をまとめれば、解放後の改修工事の主な内容は、鳳岫里の谷合からより上流に向けての普通江の新水路建設だったと推察できる。

この推察を補強する興味深い資料が一つある。北朝鮮で1990年に出版された地理書に綴じられた工事の鳥瞰図だ(図6)⁵⁴⁾。このなかの丸の付いた星印は、起工式と竣工

図5 植民地期の計画との比較 左:1938年 右:1946年



(地名や方位、説明などは谷川が付記した(左図, (1938)「平壤市街地計画平面図」1:15000)。右図, 「普通江改修工事図面」普通江改修工事完遂慶祝準備委員会編(1946)『普通江改修工事特輯』平壤市樞花里二番地, p.33)。

図6 普通江改修工事鳥瞰図



(地名や方位, 説明などは谷川が付記した((정인식 외 (1990) 『조선지리지전서—로동당시대의 대자연개조』 교육도서출판사, p.30)。

式の際に金日成が演説した場所とされ、丸のない星印は金日成が現地指導を行ったとされる場所だ。この分布は、明らかに鳳岫里の谷合から、より普通江上流部の新水路堤防に沿っている。つまり工事の主な舞台はやはりこれらの地域であり、逆にそれより南側の新水路はほぼ完成していたか、あるいはそれほど大きな工事ではなかったことを物語っていよう。

以上から、1946年の普通江改修工事は、基本的に植民地期に計画された普通江の新水路建設工事(①)であり、なかでも特に鳳岫里の谷合からより上流に向けての普通江の新水路建設工事だったと判断してよいだろう。

3.5 動員計画

次に、工事における動員計画に話を進める。

前述したように、1946年5月14日の第一回「政府機関、政党社会团体代表者連席会議」では、一部の職業の者を除く平壤市の18～55歳までのすべての健康な男子市民によって普通江改修工事を進めることが決定された。そこでは会議名の通り、様々な機関や政党、団体が、宣伝・動員・技術・資材に関して連帯責任で協力することが約束されており、そうしたことを集中的に指導するために、平安南道人民委員会委員長・洪箕疇を総責任者とする普通江改修工事指導部が構成されたという⁵⁵⁾。よって工事開始時点の総合的な指導責任は、平安南道人民委員会が負っていたと見てよいだろう。

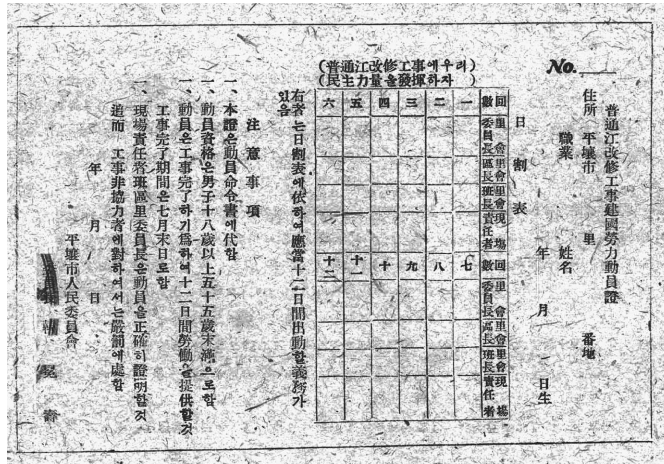
そしてその枠組みの中で、平壤市人民委員会が動員計画を立案したが、興味深いことに計画は工事開始前に何度か修正された上、工事途中でも変更された。そのため、数値情報の変動や用語の揺らぎが生じており、やや大胆に資料を読まねば全体像の把握が難しい側面もある。そうした限界を意識しながら『普通江』掲載の情報をまとめると、その動員規模や方法は概ね次のようだったと考えられる。

まず平壤市の各里において、建国労力隊（あるいは里隊）と呼ばれるグループが組織された⁵⁶。里によっては1000名を超える人々が動員されることになっていたため、その機動性を確保するためにも建国労力隊はおそらくさらに小さく分割編成されていたと思われるが、この点に関して理解可能な説明はない。建国労力隊の隊長（里隊長）は里会のなかから選ばれるとともに、隊員たちの出勤簿は里会委員長が作成・管理するという⁵⁷。そして隊長が毎日責任をもって里民を引率・出動するのだが、隊長自身は動員総指導員という役割を担う平壤市の市庁職員たちの命令に従うことも定められていた⁵⁸。

次に、労働量は人数・土量・時間によって非常にわかりやすく見積もられ、そしておしなべて平等に計算されていた。例えば当初の計画では77の里でそれぞれ動員をかけて人を集め——最高は寺洞特別里の2107人で、最小は綾羅里の143人であった——、総計7万人の都市民が工事に携わる予定であった。そして1日1人あたりの「平均計画能率立方」 0.7 m^3 の土量を担当するとして、のべ100万人を工事に投入することになっていた。約2ヶ月間の工事期間中には1人あたり12日間の出動日数が求められているので、単純計算でも7万人で12日間、すなわちのべ約84万人をひとまず確保しようというものだったのだろう⁵⁹。また、個人間や里同士は、隊列組織の編成や計画性にもとづく作業能率、政治意識や愛国心などに加えて、動員率や土量ベースで比較・競争させられるなど⁶⁰、努力や献身を数値化し、競争心や居住地のプライドをくすぐるような作業設計がされていた。

より解像度をあげて、動員される里民の視点で工事を見てみると、彼らは家から水筒と弁当を一つずつ、さらに自分のシャベルやツルハシを持って現場に向かい、朝7時半（あるいは8時）から午後5時まで働くことが期待されていた⁶¹。それぞれには「普通江改修工事建国労力動員証」が配付され、出動のたびに、里会委員長、里会区長、里会班長、現場責任者に参加確認をしてもらう必要があった⁶²。工事に気乗りがしなくても、少なくとも12日間、川辺で泥だらけになって無報酬の建設労働をせねばならず、しかも隣近所の人々によって幾重もの出席確認がなされるので、簡単に抜け駆けするわけにもいかなかっただろう。しかも服従しなかった場合は、1日300円（あるいは150

図7 「普通江改修工事建国労力動員証」



(普通江改修工事完遂慶祝準備委員会編 (1946)『普通江改修工事特輯』平壤市樞花里二番地, p.37)

円) の罰金を受けることになっていた (図7)⁶³⁾。

まとめれば、政府機関や各政党団体が集まって「総意」として決定した方針をもとに、平壤市人民委員会の計画と命令によって、「普通江改修工事建国労力動員」は進められることになった。工事においては平壤市庁の職員から里民たち一人ひとりに至るまでをツリー状に組織化し、動員をシステムティックに管理・運営・強制させる仕組みが整備されようとしていた。里ごとに集められた建国労力隊には人数のばらつきがあったが、個々人の作業や組織の仕事量は、出動回数や築堤土量などを通じて厳格に管理することが目論まれていた。要するに普通江改修工事の動員においては、都市の統治機構とそこにおける生活コミュニティを結び付けた縦割りの労働集団単位がその前提となっており、そのなかで一人ひとは、数値と計算に基づく管理、そして連帯責任の紐帯で結びつけられることが企図されていたのだ。

3.6 実際の工程

次に、先にも用いた尹公欽の報告をもとに、実際の工程について見てみたい⁶⁴⁾。以下は注のない限り、その報告を参照している。

当初、工事期間は76日間で計画された。しかし、工事が始まって一週間ほど経った5月27日に、「各政党社会団体連席会議」(これは第二回「政府機関, 各政党団体代表者連席会議」を指すと考えられる)が開かれ⁶⁵⁾, 新しく総指導本部を設置して強力な指導機構を確立することが決定されたという。どうやらあまり工事がうまくいかなかった

らしい。そして尹公欽を総責任者とした新しい総指導本部が6月1日に設けられ、同時に工事計画も見直されて、同じタイミングで新しい案に更新された。

尹公欽によれば、その新しい案では、工事は三つの段階にわけられていた。第一段階は5月21日から6月15日までで、その間は普通江上流の新水路に通水することが中心的な作業となった。この新水路は、完成後には鳳岫里の谷合に掘鑿していた新水路に接続するものであり、普通江上流の2 kmにわたって計画されていた⁶⁶⁾。しかしその工事がどの程度の具体的作業をともなったのかはよくわからない。上流部の新水路は第一段階では完成しなかったため、すべての水を新水路に流さずに旧水路にも水を流していたようだ。この期間の1人あたりの責任土量は、1~1.5 m³/日だったという。

第二段階は6月16日から6月30日までで、作業目標は堤防の嵩上げを第一とし、その次が新水路の川幅を拡げることであった。『平壤建設全史』によれば、第一段階で整備をしていた普通江上流の新水路沿いの堤防（長さ2 km、高さ5 m）を完成させ、水路幅を拡げる工事を主に行ったようだ⁶⁷⁾。

また、工事は平壤市の各里民を基本として進められていたが、この時期の最初の一週間において「労働能率と労働情緒を高める目的で」、グループを組んで組織的かつ集中的に建設を行う「突撃」という名の労働が大がかりに導入された⁶⁸⁾。そのキャンペーンを第一次突撃週間という。この突撃を行う「突撃隊」は、多くの場合単なる里民ではなく共産党員によって編成されており、かけ声の下に動作を揃え、機敏かつ大胆に共同作業を行ったので大変目立ったようだ。具体的には共産党員の「模範的作用」と、各政党や社会団体の積極的参加や協力もあって、女性同盟を含む50もの団体が突撃に参加したという。これによって平時より多くの土量を処理できた上、例えば女性の労働参加などは男性たちの女性軽視の視線を改めさせることになり、女性自身の政治的地位を一步高めたとしている。そして6月末には堤防の嵩上げと水路の拡幅を予定通り完成させた。この段階の1人あたりの責任土量は1.2~1.5 m³/日だったとされている。

第三段階は7月1日から7月15日までだ。普通江の水を完全に新水路に回し、堤防を整備するという工事の完成段階であった。具体的な場所が示されていないが、『平壤建設全史』の記述と合わせれば、おそらく南橋堤防の建設が中心だったと思われる⁶⁹⁾。この堤防は、普通江の上流部分の旧水路、新水路、そして西浦川の3河川が合流する地点に築かれたもので、改修工事中最も高い堤防（高さ10 m）であった。この堤防で3河川の水の力を受け流し、鳳岫里の谷合に開鑿した新水路に流れを導いたのだ。

また、いよいよ梅雨が到来しつつあり、工事の能率をさらにあげるために、第二次突撃週間という集中建設期間を7月4日から10日まで設けている。普通江改修工事は、最終的に当初の予定よりも二週間以上も早い7月15日に完成した。第三段階では、第二段階時に行った突撃週間よりさらに0.2 m³/日以上多い責任土量をこなしたという。

さて、以上の工程は、一読する限りでは工事が完成に向かって段階的に進んだように見える。だが当然ながら、平安南道人民委員会以下、担当当局の関係者たちの試行錯誤があったはずだ。そうした実相に接近するために、手がかりとなる疑問が二つあると思われる。

一点目は、尹公欽は詳しく書いていないのだが、どうやら起工後の数日で、工事の不備不足が露呈したと考えられる点だ。これを修正するために、5月27日に強力な総指導機構としての総指導本部が設置されることとなり、尹公欽自身がその責任者となったとしているが、そもそも指導部自体はすでにあっただ。先に述べたように、5月14日の第一回「政府機関、政党社会団体代表者連席会議」において、普通江改修工事指導部が平安南道人民委員会委員長・洪箕疇を総責任者として設置されている⁷⁰⁾。それにもかかわらず、なぜさらに総指導本部を組織したのか。こうした組織の刷新・拡充で何がもたらされたのか、より具体的に考える必要がある。

二点目は、第二段階以降、突撃隊を通じた集中建設が明らかに顕著になったと考えられることだ。「労働能率と労働情緒を高める目的で」突撃隊は組織されたが⁷¹⁾、この突撃行為は1人あたりの責任土量を上昇させただけでなく、そのパフォーマンスを通じて工事現場とそれをとりまく都市社会全体を変化させたような印象を与える。突撃は、普通江改修工事全体の潮目を変えたのではないか。1946年の普通江改修工事の過程を理解するには、この点を分析する必要がある。

そして結論から先に言えば、この二点には北朝鮮共産党（のちの朝鮮労働党）が密接に関与していた。この点について、北朝鮮共産党・平壤市党責任秘書である徐輝が記した「勝利の組織者たちへ——わが党は普通江改修工事をどのように領導し、その勝利を保障したのか」という報告文が参考になる⁷²⁾。最後にこの報告文を取り上げながら、上記の二点を手がかりとして工事全体を再検討してみたい（以下は注のない限り、その報告を参照している）。

4 北朝鮮共産党の関与と成果

4.1 総指導本部の設置

徐輝は⁷³⁾、北朝鮮共産党（以下、共産党）の普通江改修工事への関与を、かなり具体的かつ赤裸々に記述している。まず共産党は、1946年5月14日の第一回「政府機関、政党社会団体代表者連席会議」の決定を受けて、普通江改修工事の動員計画に積極的かつ模範的に参加することとなり、そこにおける広範な宣伝組織事業を担当することになったという。そして5月16日に道党常務委員会は、改修工事の意義と労力動員に対する宣伝事業組織を、平壤市党に委任した。その理由は、「今回の労力動員は解放以後初めてのものになるので、市民に対して解釈事業と宣伝事業を強化せねばならない」からであった⁷⁴⁾。

そのための具体的方法として、同月17日の会議で党員全体が積極的に工事に加わりとともに、各社会団体や芸術団体と協力しあって演劇や音楽、写真やラジオなどを用いた様々な「慰安隊」を派遣することになった。他方で、市民が動員されたことによって生じる工場や企業の生産能力の調整や、工事によって得られた労働の成果に関する講演会、はたまた新聞記事をともに読む「読報会」、あるいは談話などを催すような教養事業の展開も、共産党は担うこととなった。

つまり、平壤市民の動員に際し、その意義を伝え、工事に携わる市民たちの心情を包括的に誘導することが北朝鮮共産党の平壤市党に任されたのである。

こうして5月21日に工事が始まると、多くの共産党員が党の決定にしたがって「奮闘」を始めた。しかし残念ながら、ただちに「不足や弱点短点」が露呈してしまったという。そのため、共産党員の役割を再検討しようと、開始後5日目に「市党熱誠者大会」を開催し、課題の共有を図ったようだ。ここで報告された問題点がどれも興味深い。一例を挙げれば下記のようなものだ。

市民中多数は積極性が不足し、遊興の気分が濃厚だ。このような遊興の気分を克服せず、音楽隊や慰安隊を続派すれば、かえってその者たちの遊興気分を助長する作用しかない・・・⁷⁵⁾

他にも、共産党員たちは積極的に「宣伝」活動をしているのに、それが「手工業的」

で思うような効果があがらないといったものや、怠慢な市民や工事の完成を疑う「反動分子」の存在を指摘する報告もあった。これらの問題はかなり重大視されたようで、急ぎ「現場指導部を設置することで、動員、技術、宣伝、工具等、部門を統一指導するだけでなく、現場において発生する一切の問題を即時現場で解決する」ことが目指されたという⁷⁶⁾。この現場指導部とは、5月27日に設置された「強力な総指導機構としての総指導本部」のことと思われる。こうした体制は、単に現場における秩序の形成だけでなく、例えば市内で開かれる市民たちの集いで工事の様子を広報したり、あるいはマンガや絵画、文芸や演劇などを通じて工事情報を広く発信したりする作業にも大いに貢献したようだ⁷⁷⁾。共産党によって工事現場が引き締められるとともに、工事の情景がリアルタイムで平壤のあらゆる場所や都市民たちの社会活動のなかに浸透していったのである。

さて、前述の工事工程の分析で二つの疑問をあげたが、その一つは平安南道人民委員会による改修工事指導部がすでにあつたにもかかわらず、なぜ改めて工事が始まってすぐに総指導部を設置したのかということだった。その理由は、この「党熱誠者大会」で指摘されたような事態にあつたと考えられる。つまり、市民たちの動員に失敗したため、新たに共産党が総指導部を設置することで、現場の指導体制を大胆に強化しようとしたのだろう。

4.2 工事を変えた突撃

徐輝によれば、こうした試行錯誤のなかで、党員たちがそれまで以上に市民たちのなかに入り、彼らと親密な関係を築きながら、労働の模範となっていくことに成功し、徐々に現場全体の仕事量に好影響が見られるようになってきたという。この状況を受けて、平安南道の道党・責任秘書である安吉から、平壤市党責任秘書の徐輝に向けて、さらに次のような指示が出された。それは工期を短縮して梅雨前に工事を終わらせるために、各市民の責任土量を6月16日より0.5 m³/日増やせという。そしてその意義を十分に市民に理解させ、同時にそれぞれの「自覚的作業熱誠」をより高めるように仕向けることを党員に求める、というものであった⁷⁸⁾。この結果、現場の共産党員たちが提議したのが、「改修工事突撃運動」の発動である。

前節の最後で、この突撃隊による集中建設——すなわち突撃運動の登場が、普通江改修工事全体の雰囲気を変えたのではないか、という問いを立てたが、それは以上のような経緯で計画されたのである⁷⁹⁾。そして6月16日の朝、道党の思惑通り、現場で働く

里民たちの前に51もの突撃隊、総勢3157名が不意に姿を現すこととなった。

これらの突撃隊は、おそらく派手なかけ声を掛け合いながら、見る者を意識したパフォーマンスを打ち出したと思われる、そんな「飛虎のような作業は、各里民たちに強烈な衝動を与えた」という。そして「競争の火がついた」⁸⁰⁾。

重要なことは、先述の通り突撃隊は様々な企業所や各種団体などの共産党員を中心に組織されており、里民による建国労力隊とは別のつながりで構成されていたことだ。いわば「ご近所さん」のような平面的かつ生活基盤に根ざした里民同士のつながりと、共産党を核とした職場や団体などの社会・経済・思想的つながりが現場で交錯したのである。このことは、共産党自体の宣伝になったことはもちろんだが、共産党が平壤市民を立体的に繋げ、団結させる縫い糸のように機能したと考えられる。

加えて、別の観点から言えば、誰でも建設に加わって土に触って同じ汗を流せばその場所に愛着を持つと同時に、住民意識や共に働いた仲間との連帯感は必ず生まれる。そう考えれば、共産党員を含む市民たちは、都市民としての様々なチャンネルを通じて共に工事にアプローチすることで、平壤という場所と心情的かつ集団的に結びついたと言ってよいだろう。それに、工事への動員は都市民に対する有無を言わせぬ強制ではあったが、同時に宣伝や教育を通じて人々を同じ共同体へと包摂しようとする試みであったことも事実だ。人々が民族的な差別や差異、あるいはあからさまに垂直的な関係を意識せずに工事に向き合えた点は、植民地期とは大きな違いだっただろう。

こうして突撃は、この後も自然と継続され、今度は7月1日に「労働法令慶祝突撃隊」なる21個、合計3638名の突撃隊が出現することとなった。実はこの直前の6月24日に労働法令が発表されており、普通江改修工事現場でもこの法令の朗読や解釈演説会が共産党員によって開催されていた。こうした慶賀ムードを受けて、各職場などで突撃隊が組織されたのである。7月4日から第二次突撃週間が始まると、全ての現場で突撃隊が絶えないほどになり、そしていよいよ工事はクライマックスを迎えることとなった。梅雨入りが近づき、7月5日頃から大雨が連続したのである。

その最も重要な舞台は、旧水路、新水路、西浦川の3河川の流れを受け止めるために計画した巨大な南橋堤防の建設現場で、洪水のなかで堤防の建設をするような大変な状況だったようだ。そこには平壤市内の里民たちだけでなく、他郡からも応援がやって来たり、共産党は約2500人の平壤市共産党突撃隊を組織し、昼夜問わず、堤防の嵩上げに努めた。彼ら・彼女らは平壤市中心部にあった共産党の建物から、赤い旗を立ててトラックで現場に向かったようで、工事の緊迫感と使命感を漂わせて出動する姿は、都市

民たちに党の貢献をアピールすることになったことだろう。

そして、工事の締めくくりが近づくと、全ての共産党員に対して、7月13日には適当な同志たちと夜間突撃隊を組織し、14日には各機関や職場、「細胞」から突撃をして、そして最後の15日には全体の党員で突撃に参加して工事を完遂せよとの指示が出た。最後にいたってのこのような突撃の乱発は、切迫したものというよりは、工事のフィナーレを飾る儀礼的で祝祭的なものだったと思われる。いずれも党の要請を上回る人びとが応じたとされており、そんな党の制御を超えて集まって来た人々による突撃で、普通江改修工事は大団円を迎えたのだった。

以上の経過から、第二段階から登場した突撃運動によって工事は明らかに変化したと言ってよいだろう。それはある種の労働パフォーマンスであり、競争や仲間意識を煽り、高揚感を醸し出すこととなった。また、現場では共産党員のリードで土地改革や労働法令などに関する社会変革事業の「宣伝」がなされていたが、それは解放後の新しい社会の確立を祝う慶祝ムードの醸成を背景に、突撃隊の出現にまで繋がっていった。突撃運動は、工期短縮のみならず、共産党の言う「労働情緒」を造り出すことに成功し、現場に新しい活気を吹き込んだのだ。当然共産党に対する印象は顕著に向上したようで、共産党自身も「今回の改修工事過程で、群衆との親密な団結をさらに強化拡大した」と述べている。結局、1946年4月に約2万6000人だった共産党員は、8月には約36万6000人となっており⁸¹⁾、普通江改修工事はこの党勢拡大に資したことは間違いないだろう。

5 結 論

5.1 普通江改修工事の再検討から見えてきたもの

以上、植民地期と解放後の普通江改修工事に関して、歴史的な考察を行ってきた。本稿の成果としては次の七点があげられるだろう。

一点目は、植民地期の普通江改修工事の全体的な計画概要とその変遷を明らかにしたことである。なかでも特に、戦時下の予算削減や労働力不足により、朝鮮人たちを動員しても普通江新水路(①')は7割しか完成しなかったことを示した。

二点目は、普通江の工事が解放後も継続していたということを、朴均采のような現地の技術者の言葉で確認できたことだ。彼は植民地期からこの工事に携わっていたと考えられる。普通江改修工事では、具体的な計画内容や背景にある目的、そして技術人材ま

でが連続していたのだ。ただし、こうした状況は、工事を主体的に利用・継承したというよりも、工事が植民地期からのいわば慣性にしたがって連続したという方が自然だろう。それではその慣性からいつ離脱するのか。

その点が三点目の結論となる。植民地期から続いていた工事は、1946年5月初旬——遅くとも5月21日を境に、大きく転換したと考えられる。この点は情報が少なくまだはっきりとは論証できないが、おそらくそれにはソ連が関与している。植民地期とほぼ同じような建設が続くなかで、5月初旬に金日成とロマネンコが現地を訪れ、平壤市民を動員した一大建設イベントとして普通江改修工事をデザインすることを思いついた可能性が高い。少なくとも、こうした建設のアイデアによって、普通江改修工事は新しい権力体制下における都市民たちの主体的な工事となるように設計されたのだ。

四点目は、解放後の建設作業は解放前とは全く異なる社会構造下で始まったが、工事計画の物理的な内容は、植民地期の形を完全に踏襲していた点だ。しかも旧権力である日本は、強引な手法を用いても工事を完成できず、敗戦によって7割で放り出した。これを金日成ら新権力側の視点で見れば、工事は残り3割ほどの作業で、西平壤一帯の洪水を減らし、その後は工業用地や新しい市街地の建設に進むことができる可能性を秘めていた。投入する労力に比して、得られるものが大きかったと言わねばならない。そしてその残された3割とは、普通江上流の新水路建設と、その新水路と旧水路、そして西浦川の3河川が合流する地点に築く南橋堤防であった。

五点目は、普通江改修工事を完遂するという目的の下で、平壤市庁の職員と里ごとの男子市民たちが、里会の委員長やあるいは里隊長を介して、縦割りの労働集団として管理・運用された点だ。しかもそれは、都市全体で包括的にリストアップされた。つまり、同一の労働管理・動員プラットフォームが統治権力側に構築されたのである。これによって里や里に属する人びとの労働は、土量や時間を通じて一律に比較・競争・評価可能な均質な「分子」として扱われることが可能になり、だからこそ批判的で非協力的な態度を取っている人物は、「反動分子」としてわかりやすくはじき出される仕組みになっていた。このことは逆に見れば、統治権力に逆らうことは植民地期以上に難しくなったはずだ。新しい権力者たちの暴走や独裁化などを警戒する都市民たちにとっては（当然、そうした人々はいたはずだ）、工事がそうした抑圧的な社会の生成に寄与しようとは思ってもよらなかったのではないか。少なくとも普通江改修工事を通じて平壤の都市社会が全体主義的な方向に向かって歩みを一歩進めたことは否めないだろう。

六点目は、工事推進者たちが三段階で捉えていた工事過程の評価を再度トレースする

ことで、平安南道や平壤市の人民委員会による工事進行が、当初うまくいかなかったことがわかってきた点だ。当局が講演会や演劇などを通じてさらなる労働を鼓吹し、体制を翼賛するように誘導しようとしても、その催しそのものを遊興的に消費してしまう里民たちがいた。この「課題」に挑んだのが共産党である。党が総指導本部を作って現場に組織的に介入することで、工事体制を引き締めたのだ。そして新しい計画も適応され、工事は当初よりも進展するようになった。

七点目は、普通江改修工事はそうした自己点検作業を繰り返しながら進んだが、最も大きく工事に影響を与えたと思われるのは、突撃隊による突撃運動だったと考えられる点だ。それは工事自体の能率を上げただけでなく、その自己犠牲的なパフォーマンスで集団的な興奮と結束、そしてそれに基づく組織間の競争意識をさらに高めた。『普通江』の行間には高揚感が満ちており、どんな対象でも——女性でも労働法令でも——、突撃という行動様式と組み合わせれば、細かなロジックを要さずとも国家建設に貢献するようなわかりやすい物語が勝手に立ち上がってきたような印象すら受ける。突撃は、植民地支配からの解放と新国家建設という晴れがましい社会の雰囲気なかで、一つの目的に向かって奉仕する全体主義的な物語を生み出す便利な行動様式であったと考えられよう。ただし、それは一歩まちがえればナショナリズムへの陶醉による集団的思考停止に陥る可能性があり、こうした姿勢が都市民のなかに浸透してゆくときに、どのような社会が立ち現れていくのかという点については、さらなる検討が必要だ。とりあえず今言えることは、突撃が普通江改修工事を加速させ、工期を短くし、そして工事に介入した共産党の権威を高めただろうということである。

5.2 「私たち」の普通江改修工事

植民地期と解放後の普通江改修工事には、物理空間上の差異はなかった。そしてそれは実は動員という意味でも、本質的な差異はないと言いきなめなかもしれない。普通江改修工事における戦争末期の日本による特別報国隊への動員は、規模こそ違えど同じ動員であった。そうだとすれば唯一の差は、その工事を平壤の都市民たちが「私たち」自身の工事として捉えることができたかどうかではないだろうか。日本植民地政府は、少なくともそれを促すような努力や工夫をしておらず、むしろ「国民儀礼」と称して日本的なものを多くの朝鮮人たちに押しつけるなど、明らかに失敗していた。他方で解放後の金日成らは、工事の恩恵云々以上に、その工事に主体性をもって関与することの面白さを、プロデュースすることに成功したと言えるかもしれない。それは土量と時間を基

本とする競争であると同時に、その場所への愛着と住民意識を醸成するような共同作業であったが、なによりそこに突撃運動を通じて自己犠牲や連帯の物語性を持ち込んだことで、人びとは労働に夢中になった——もちろん先述のようにそれは別の全体主義的社会に向かう可能性を宿していたわけだが——。その意味で、突撃は普通江改修工事が帯びていた日本植民地期からの連続性にとどめを刺し、工事を北朝鮮に生きる「私たち」自身の建国作業へと転換させるための技法——脱植民地化の技法だったとも言えよう。こうして、普通江改修工事は植民地期の慣性を脱し、平壤を「民主首都」につくり変え、新しい国家を築くための工事へと変わっていったのである⁸²⁾。

普通江改修工事が終わり、朝鮮戦争からの復興が落ち着いてしばらくたつと、1970年から現在の普通江区域書齋洞付近を中心に、工事を記念して革命史跡地の造成が始まった。翌年高さ15mの普通江改修工事記念塔がそこに完成している⁸³⁾。また、工事30周年を迎えた1976年には、金日成が最初の土を掘った場所に、普通江改修工事標識碑も建てられた。他方で旧水路の運河化(②)は、朝鮮戦争からの復興期にあたる1950年代末に整備が始まり、市民が集う緑豊かな親水公園となって、現在に至っている⁸⁴⁾。

謝辞

本研究はJSPS 科研費20H01330および、同17KK0024の研究助成による成果である。

注

- 1) 金聖甫ほか(2010)『写真と絵で見る北朝鮮現代史』コモンズ, pp.48~49。
- 2) 저자 미상(1983)『백과전서』3, 과학, 백과사전출판사, p.169。
- 3) 김경수(1979 a)「경애하는 수령 김일성동지께서 발기하시고 조직지도하신 력사적인 보통강개수공사(1)」『력사과학』90호, 과학백과사전출판사, pp.8~13, および, 김경수(1979 b)「경애하는 수령 김일성동지께서 발기하시고 조직지도하신 력사적인 보통강개수공사(2)」『력사과학』91호, 과학백과사전출판사, pp.9~15。
- 4) 김태운(2022)『근현대 평양의 도시계획과 공간 변화 연구(1937~1960)』서울시립대학교 국사학과 문학박사학위논문。
- 5) 김태운(2022), 前掲書, p.65, p.74。
- 6) 例えば韓国では朝鮮総督府庁舎が解放後50年にわたって「利用」されたし、1983年に完成したインドネシア最大のアサハン水力発電所などは、オランダ統治時代に構想されている。このような事例は枚挙に暇がなく、住宅などを含めれば、使えるものを「利用」せずにわざわざ壊した事例はむしろ少ないだろう。
- 7) 普通江改修工事完遂慶祝準備委員会編(1946)『普通江改修工事特輯』平壤市槿花里二番地(以下、普通江(1946)とする)。

- 8) 広瀬貞三(1999)「植民地期の治水事業と朝鮮社会——洛東江を中心に」『朝鮮史研究会論文集』第37集, 朝鮮史研究会。
- 9) 朝鮮総督府鉦工局「昭和19年12月 第84回帝国議会説明並答弁資料」(朝鮮総督府(1994)『朝鮮総督府帝国議会説明資料』9巻, 不二出版, p.228)。
- 10) 鴨川の流域面積は210 km², 延長23 km, 普通江の流域面積643 km², 延長59 km。
- 11) 朝鮮総督府土木課「大同江普通江合流点附近改修計画説明書」(1934年度)(韓国国家記録院(CJA 0014719))。
- 12) 朝鮮総督府土木課「大同江普通江合流点附近改修計画説明書」(1935年度)(韓国国家記録院(CJA 0014735))。朝鮮総督府(1940)『第二次・第三次朝鮮窮民救済治水工事年報』昭和九・十・十一年度, 朝鮮総督府内務局, p.61。
- 13) 「中斷中の普通江工事道当局継続言明」『朝鮮中央日報』朝鮮中央日報社, 1935年10月15日, 3面。
- 14) 例えば堤防は875 mに, 堤防上部の幅も5 mに, そして船溜の広さも40万 m²から23万 m²になるなど, 全体的に規模が小さくなっている(朝鮮総督府(1940), p.62)。このうち, 堤防は1935年12月に完成したようだ(「普通江築堤工事 廿日ㄹ完成」『毎日申報』毎日申報社, 1935年12月21日, 4面)。
- 15) 「附図第二号 平壤都市計画街路網運河及公園配置図」朝鮮総督府(1930)『平壤都市計画書』朝鮮総督府内務局土木課。
- 16) 朝鮮総督府(1930), p.178。
- 17) 朝鮮総督府(1930), p.70。
- 18) 朝鮮総督府(1930), p.178。
- 19) 「普通江増水」『毎日新報』毎日新報社, 1938年7月17日, 3面。
- 20) 「普通江増水六米 濁流屋上まで浸水」『朝鮮新聞』朝鮮新聞社, 1939年9月10日, 9面。
- 21) 「豪雨再襲・普通江大増水」『毎日新報』毎日新報社, 1940年8月23日, 8面。
- 22) 「七千五百戸浸水」『毎日新報』毎日新報社, 1942年8月17日, 3面。
- 23) (1938)「平壤市街地計画平面図」1: 15000。
- 24) 少なくとも1933年7月9日の時点では, まだ大馳嶺里を貫く計画が生きていた(「普通江ㄹ運河」『毎日申報』毎日申報社, 1933年7月9日, 5面)。
- 25) 「普通江改修流域地帯変更決定乎」『毎日申報』毎日申報社, 1936年7月18日, 5面。
- 26) 「西平壤駅北方に大操車場を新設」『大阪朝日新聞』西鮮版, 朝日新聞社, 1936年3月4日, 5面。
- 27) 注25)と同じ。
- 28) 朝鮮総督南次郎「中小河川改修工事費起債ノ件」(1941年8月14日)(韓国国家記録院(CJA 0003576))。
- 29) 注9)と同じ。
- 30) 普通江は1936年に総督府直轄河川に移管されることとなり, 国庫補助を受けることと

- なった（「多年要望하든普通江移管實現」『毎日申報』毎日申報社，1936年7月16日，5面）。
- 31) 「中小河川改修主要工事」『毎日申報』毎日申報社，1937年1月21日，5面。
- 32) No.75, Korea (including Tsushima and Quelpert): Volume 1 (Reports), Chapters VII-XIV, April 1945 THRU Volume 2 (Plans), April 1945, page 128 Roll 3, Joint Army—Navy Intelligence Studies (JANIS), 1944-1945, Record Group 243, National Archives at College Park, MD.
- 33) 1938年8月の時点で、すでに二回にわたって予算が削減された（「平南の中小河川 改修工費に大鉅」『朝鮮新聞』1938年8月7日，2面）。年限も8ヵ年継続となった（注9参照）。
- 34) 「잠자는勞力을活用」『毎日申報』毎日申報社，1941年7月28日，3面。
- 35) 鄭在貞（2005）「日帝下朝鮮における国家総力戦体制と朝鮮人の生活」日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書』第3分科篇下巻，日韓歴史共同研究委員会。
- 36) 「普通江廢川利用 大工場地出現乎」『毎日申報』毎日申報社，1936年8月21日，5面。
- 37) 「普通江岸工業地区 分讓希望者多数」『毎日新報』毎日新報社，1940年7月11日，7面。
- 38) これらの作品に関する別稿を現在準備中である。
- 39) 任正彬（1918～1946年）は京畿道富川郡生まれの若者で，東平壤の船橋四里の人々を率いて現場責任者として参加していた平壤市民である。子供の頃に父親が蒸発し，伯父を頼って母親とともに平壤に移り住んだ。自動車工場や兵器工場，製鉄所などで少年工として働いた経験が解放後重宝されたようで，1945年12月には共産党にも入党し，党活動にも熱心に参加していた。しかし，普通江改修工事の竣工直後にあたる7月16日朝，南橋堤防の夜間突撃作業の後に豪雨のなかで普通江の濁流にのまれ亡くなった。
- 40) この資料には普通江改修工事の工費についての記載がない。里別の動員数などについても計画数はあるが，実際の動員数に関して細かな情報は無い。またあったはずのソ連の具体的関与や工事における死者数についても記載はなく（先の任正彬が唯一の死亡者か？），報告書とするには不十分な点も多い。
- 41) 道土木技術責任者「普通江改修의 重要性 斗 工事 經過 報告」普通江（1946），前掲書，pp.27～28。
- 42) 注22) 参照。
- 43) おそらく植民地期とそう変わらない方法で施工や労働管理を行っていたと考えられるが，それに関する言及はない。
- 44) 平安南道人民委員會의 「普通江改修 工事를 急速히 完遂하기 爲한 政府 機關 政 党 社会 团体 代表者 連席會議 決定書（1946年5月14日）」普通江（1946），前掲書，p.25。
- 45) 韓国史データベース（<https://db.history.go.kr/>）による。
- 46) 平壤市施工団の所属人数は，わずかに10人程度だったという。そもそも植民地期において日本は朝鮮人技術者を積極的に育ててこなかった経緯があり，解放後の社会におい

- て朝鮮人技術者は極めて少なかった（평양건설전사편집위원회편 (1997) 『평양건설전사』 2, 과학백과사전출판사, p.13）。
- 47) 朴均采は植民地期の技術者であり、高度な土木工学的知見は、技師ほどは持っていなかったと思われる。そのために計画を抜本的に変更するのは難しくもあっただろう。
- 48) 평양건설전사편집위원회편 (1997), 前掲書, pp.17~18。
- 49) 中国延安で華北朝鮮独立同盟の活動をしていた尹公欽は、解放直後に帰国し、平南臨時政治委員会総務局長などを歴任した。普通江改修工事の直後の1946年8月には北朝鮮労働党の中央委員に選出、1952年11月に財政相、1954年3月に商務相、1956年4月党中央委員となったが、1956年に党の指導部を批判して八月宗派事件を起こし、肅清された。延安派の中心人物の一人である（姜萬吉외編 (1996) 『한국사회주의운동인명사전』 창작과비평사, p.304. 김선호 (2020) 『조선인민군: 북한 무력의 형성과 유일체제의 기원』 한양대학교 출판부, p.315）。
- 50) 尹公欽「普通江改修工事完遂総結報告」普通江 (1946), 前掲書, p.51。
- 51) 平安南道人民委员会의 「普通江改修工事を急速히完遂하기為한政府機關政党社会团体代表者連席會議決定書 (1946年5月14日)」普通江 (1946), 前掲書, pp.24~26。
- 52) 「普通江改修工事図面」普通江 (1946), 前掲書, p.33。
- 53) 평양건설전사편집위원회편 (1997), 前掲書, p.19。
- 54) 정인식 외 (1990) 『조선지리지전서——로동당시대의 대자연개조』 교육도서출판사, p.30。
- 55) 洪箕疇は1945年に平南建国準備委員会に参加し、1946年1月に平南人民委员会委員長、1947年2月には北朝鮮人民委员会副委員長、そして1948年9月に最高人民會議常任委员会副委員長となった（平安南道人民委员会의 「普通江改修工事を急速히完遂하기為한政府機關政党社会团体代表者連席會議決定書 (1946年5月14日)」普通江 (1946), 前掲書, pp.24~26, および「한국민족문화대백과사전」による (<http://encykorea.aks.ac.kr>))。
- 56) 「普通江改修工事建国勞力動員計画」普通江 (1946), 前掲書, p.36。
- 57) 里会が実質的な里レベルの人民委员会を示すのかどうか判然としない。各里会は動員指導者を設けているが（普通江 (1946), 前掲書, p.24), これが別の箇所では里隊長とされている役職と類似している（普通江 (1946), 前掲書, p.36), ここでは同じ役職と判断した。
- 58) 「普通江改修工事建国勞力動員計画」普通江 (1946), 前掲書, p.36。
- 59) 「普通江改修工事里別担当土量表」普通江 (1946), 前掲書, pp.40~43。
- 60) 尹公欽「普通江改修工事完遂総結報告」普通江 (1946), 前掲書, pp.64~65。
- 61) 「普通江改修工事建国勞力動員計画」普通江 (1946), 前掲書, p.35。
- 62) 「普通江改修工事建国勞力動員証」普通江 (1946), 前掲書, p.37。
- 63) 5月17日付の「布告」では150円。
- 64) 尹公欽「普通江改修工事完遂総結報告」普通江 (1946), 前掲書, pp.50~70。

- 65) 5月14日に開催された「各政党社会団体代表者連席会議」の二回目の会議と思われる。
- 66) 평양건설전사편집위원회편 (1997), 前掲書, p.23。
- 67) 평양건설전사편집위원회편 (1997), 前掲書, p.24。
- 68) この言葉自体はロシア語由来であり、これ以前より生産現場において用いられていた(和田春樹(2012)『北朝鮮現代史』岩波書店, p.42)。
- 69) 평양건설전사편집위원회편 (1997), 前掲書, p.23。
- 70) 平安南道人民委員회의「普通江改修工事を急速히完遂하기爲한政府機關政党社会団体代表者連席會議決定書(1946年5月14日)」普通江(1946), 前掲書, p.25。
- 71) 尹公欽「普通江改修工事完遂総結報告」普通江(1946), 前掲書, p.55。
- 72) 徐輝「勝利의 組織者들에게——우리党은 普通江改修工事を 어떻게 領導하였으며 그 勝利를 保障했는가」普通江(1946), 前掲書, pp.71~91。
- 73) 徐輝も尹公欽と同様に、解放前は中国で抗日運動に関わっており、華北朝鮮独立同盟延安支部の盟員として活動していた。1945年末に平壤に帰国している(姜萬吉외編(1996), 前掲書, pp.238~239)。普通江改修工事のときには北朝鮮共産党・平壤市党責任秘書で、その後モスクワ留学を経て朝鮮労働党中央委員会副部長、朝鮮戦争後は1953年10月朝鮮職業総同盟副委員長、1956年8月には同委員長などを歴任した。彼も延安派の中心にいた一人で、八月宗派事件に尹公欽らとともに深く関与し、結果粛清された(「한국민족문화대백과사전」による(<http://encykorea.aks.ac.kr/>))。
- 74) 徐輝「勝利의 組織者들에게——우리党은 普通江改修工事を 어떻게 領導하였으며 그 勝利를 保障했는가」普通江(1946), 前掲書, p.73。
- 75) 同上, p.76。
- 76) 同上, p.75。
- 77) 同上, p.87。
- 78) 同上, p.77。
- 79) それ以前には民青員600名、石炭管理局の150名が、それぞれ突撃を行った。これは単発的な突撃で、おそらくこれらの結果が良かったから、組織的に突撃を始めたと考えられる(同上, p.78)。
- 80) 同上, p.81。
- 81) 金聖甫ほか(2010), 前掲書, p.31。
- 82) 普通江改修工事は1946年5月に、日本植民地期の工事とは全く異なる全都市民の動員工事として始まり、翌6月に「突撃」によって工事の様相がさらに変化した。こうした変化を通じて、解放後の平壤における土木工事が、この時期に日本の影響圏から脱したと見ることができる。ただし、巨大かつ政治的中心都市・平壤でなされた工事であるという点を根拠にして、この工事一つで金日成らが指導する全ての土木工事が歴史的な転換点を迎えたとするのは勇み足であろう。地方都市の工事なども含めて日本植民地期の工事からどのように本質的な変化を遂げていくのかという点など、今後より広く考察していく必要があると思われる。また、本稿では工事を前進させる上で突撃作業の持ってい

た肯定的側面を主に見てきたが、当然否定的な側面もあったと思われる。例えば人力が労働力の中心となることで、本来果たされるべきであった工事現場の近代化などが遅れたり、非合理的な作業がなされたりしたはずだが、そうした点は突撃のかけ声でかき消されたと予想される。強力かつ強引な共同作業体制がイメージさせる社会の全体主義的側面だけでなく、このような施工の合理性やリスク管理などの科学的側面からの検討なども、さらに必要であると考えている。

83) 평양건설전사편집위원회편 (1997), 前掲書, p.28。

84) 同上, p.312。

(第20期第6研究会による成果)